

万葉集の「妹背山」に関する若干の考察

藤田 富士夫

1. はじめに

越中国守であった大伴家持は天平20年（748）春巡行で能登四郡（羽咋、能登、鳳至、珠洲）を視察したおりに鳳至郡で次の歌を詠んでいる。

鳳至郡にして饒石川を渡る時に作る歌一首
妹に逢わず 久しくなりぬ 饒石川 清き瀬ごとに 水占延へてな
(巻17・4028)

この歌は、通常の国守巡行コースから外れているとされ、「大伴家持の寄り道問題」として様々な考察が呈されている。⁽¹⁾

このことについて私は、本紀要の前号で「大伴家持が見た饒石川の景」と題して検討を加え、歌作の動機を饒石川（現・石川県輪島市門前町の仁岸川に比定されている）が有する景にあるとした。なかでも仁岸川の河口に位置する通称「城山」は、奈良県・吉野川の「妹山」の姿形と酷似している。その情報を大伴池主が事前に得て、家持を当地へと導いたと推定した。このことから、「家持は仁岸川を吉野川に擬定し城山から妹山→妹（妻）への想いをつのらせ」、歌作へとつながったとした。⁽²⁾

拙稿の想定では、家持と池主は少なくとも越中国への赴任以前に吉野を訪れており、その際に吉野の妹山を（同時に背山も）（奈良県吉野町所在）見ていたこととなる。池主は天平18年（746）には越中国掾として在任（巻17・3946左注）しており、家持は同年にやや後れて越中国守として赴任した。すなわち、天平18年以前には吉野の妹山・背山は存在しており、それらを家持や池主は周知していたことが導きだせる。

ところで万葉集の「妹背山」歌研究の第一人者である村瀬憲夫氏は、集中の妹背山歌全15首を検討し、それらすべてが紀ノ川の妹山・背山（和歌山県かつらぎ町所在）を詠んだものと説いている。村瀬氏は、「古い時代の歌に妹山は現れない。だからおそらく妹山は、背山があるのなら妹山もあってほしいという、ここに行く旅人の旅どころが作り上げた山の名であったのだろう」としている。吉野川の妹山・背山については、『古今和歌集』（恋五、巻15・828）（913年頃成立）が、妹背山と吉野川とをセッ

トで詠み込んでいることから、「この古今集当該歌の創出した風景が、後世、紀の川を中に挟んで背山の対岸にある山を、そして吉野川を中に挟んで妹山の対岸にある山を、それぞれ妹山（通説）、背山と定着させることになったのである」と説いている。

かかる説が成立するならば、家持も池主も彼らの時代には吉野川の妹山・背山は未だ（発見）されていないので、その山容を知るはずもない。とすれば、吉野川の妹山と能登（当時は越中国に含まれていた）仁岸川の「城山」との酷似性から、そこで家持が「妹に逢わず」を想起したとする拙考も空論となる。しかしながら私は家持や池主は、吉野川の妹山・背山を周知していたと確信している。だいたいの論旨は前号で述べているが、その折に書き残した若干について、ここに記しておきたい。

2. 二項対立の視点から

最初に、「妹山・背山」の名称について触れたい。笠金村（巻4・544）や柿本人麻呂歌集（巻7・1247）が「妹背山」と詠んでいるように本来的に一体感を成す用語である。

構造主義人類学の祖レヴィ＝ストロースは、「神話の方法」には二項対立、変換、媒介の3つがあると述べている。中でも「社会生活の経験であろうと、すべて『二項対立』の総和に還元していくやり方」は当該言語を考える上で有効と考えられる。それは〈流水／静水〉、〈地の水／天の水〉、〈奇数／偶数〉、〈言語的／非言語的〉、〈男／女〉などの組み合わせの型として認めることができる。

このことは、言語体系の類型でも指摘されている。牡ろば／牝ろば、牡猫／牝猫は「等価対立」（＝二項体系）に分類でき、「両項は同等の重要性を与えられている」とされている。⁽⁵⁾

構造主義的視角からの二項対立は、『古事記』神話における「伊邪那岐命／妹伊邪那美命」、「海幸彦／山幸彦」、「木花佐久夜毘売／石長比売」などに典型的である。「妹山／背山」（以下、／は二項対立を意味する）は、これらの神話と同様な二項対立の類型に属しているのである。

二項対立の類型に従えば、「妹山」と「背山」とは、常にセットで認識されていることとなる。これらの発生期において、それぞれが単独、個別に存在した可能性はほとんどないのではなからうか。私は、実体として「妹山／背山」の自然的秩序を成す景が存在していて、それに文化的秩序としての記号形式「妹山／背山」が定位（付与）されたと考えている。⁽⁶⁾ その逆は、まったくの偶然性を加味しない限り成立しないであろう。

村瀬憲夫氏は、「吉野の場合は、はじめ妹山があり、それと対応上、対岸に背山が求められたのであろう。紀伊国の場合ははじめセノヤマ（背山）があり、それと対応上、対岸に妹山（通説。…藤田注…村瀬氏は背山二峰説をとる）が求められたのであった」としている。⁽⁷⁾ 村瀬氏によれば、『万葉集』妹背山歌全15首すべてが紀ノ川の景を対象としたものであるという。

その是非を判断する力量は持たないが、村瀬説に従えば紀ノ川の「背山」は対応する実体としての妹山が存在しない中で成立したことになる。また、吉野川の場合はその逆ということになる。これは「あつて欲しいと願ったら、そこに妹山や背山が出現した」といった自在論のようにも受け取れ、いかにも出来すぎの感がする。

村瀬氏は、紀ノ川にあつては背山二峰説を支持補強している。かかる説への私見は後述するが、氏に従えばもともと二峰の妹背山として眼前に横たわっていることになるので、あえて後から「妹山」を求める必要もない。村瀬氏による背山先行説と背山二峰説については二律背反しているように思われる。

3. 背山先行説における狭山と兄山

背山先行説では、ほかにも根拠が求められている。その一つが、もとは「狭山」であったが「背山」とおきかえられたことから、妹山が連想され、妹山・背山が併称されたとするものである。⁽⁸⁾

確かに当地では紀ノ川の川幅が狭くなる。けれどもその地が「狭山」と認識されていたかは分からない。今日、背山に比定されている山容には鉢伏山の名が冠せられている。その山頂は川筋から約750mも内陸に寄っていて、川幅の狭いことに対して何の意味作用も果たしていない。それこそ今日の「鉢伏山」の呼称がより実景を反映している。逆に「背山（『紀』では…兄山とする…）」から、語源説明のために「狭山」が符合された可能性はないだろうか。仮に狭山説が成立するとしても万葉歌で「背山」が詠まれた瞬間には二項対立の世界が成立している。このようなことから、狭山説は背山先行説の根拠とは成り得ないと思われる。

また、別の根拠に『日本書紀』孝徳天皇の大化2年（646）の改新詔で、畿内の範囲を定めた折、「南は紀伊の兄山（兄、此には制と云ふ）より以来…（略）…」としていることがあげられる。兄山だけが登場しているからである。

『古語大事典』は、「せ」について「【兄・夫・背・妹】〔名〕（主として、

女性から) 兄・弟・夫・愛人など、または他の男性を親しんで呼ぶ語。「妹(いも)の対」と解説している。

すなわち『日本書紀』が「兄」字を用いたのは、その背景に「妹」が想起されていることを暗示している。「兄山」とだけ記されたのは、妹山が認知されていなかったからではなく、無意識のうちに省略されたためであろうと思われる。「妹山」に対する日常的な感覚の一端が次の歌に示されている。

紀伊道にこそ 妹山ありといへ 櫛上の 二上山も 妹こそありけれ
(巻7・1098)

ちなみに訳文は、「紀州路に 妹山はあるというが 櫛上の 二上山にも 妹の山があったわい」とされている。

このように、『日本書紀』に「南は紀伊の兄山」とだけ記されていたとしても、「妹山」が認知されていなかったとする根拠とはならないであろう。

4. 背山二峰説について

紀ノ川の妹山／背山の比定について諸説がある。『かつらぎ町史 通史編』が簡便に整理しているので引用したい。

「背山と対で詠まれることの多い妹山については、紀ノ川をはさんで対岸の町域の西渋田に所在する通称『長者屋敷』に通常比定され、この見解は鎌倉時代初めに顕昭によって編まれた歌学書『袖中抄』にまでさかのぼることができる。しかし一方では、妹山は背山に比べると、独立した山容をなさないため、単なる文飾として不在とみなす説(本居宣長『玉勝間』)や、紀ノ川のなかに浮かぶ船岡山を背山とし妹山は存在しないとすする説(貝原益軒『南遊紀行』)、背山の二つの峰(通称「鉢伏山」と「城の跡」)を総体として妹背山とする説(本居内遠「妹山背山弁」)なども存在する」とある。

『かつらぎ町史 通史編』では村瀬憲夫氏の背山二峰説を適当とし、「妹山の位置」と題する風景写真を掲載している。写真では、妹山・背山(いわゆる背山二峰説)を“新説”、対岸の長者屋敷の妹山を“通説”と紹介している。ここに記された通説と新説の位置が「妹山」比定の今日的到達点とできよう。

通説とされる長者屋敷について、村瀬氏は澤瀉久孝氏が、背山が独立し

た山であるのに対して対岸の山はつり合いがとれていないとしているのを引き、通説とされる長者屋敷は再検討の余地があるとした。そして、早くに本居内遠(1792~1855)が背山は2つの峰をもっていて、それに妹山・背山を比定していることに着目し、前出の二上山歌(巻7・1098、作者不詳)をもって補強した。この歌から、「妹之山の所在を考える際に、二上山の山容は無視できない。さらに言えば、上代の文献に現れる筑波山にしろ、越中国の二上山にしろ、二峰を持つ山は男女、妹背の発想を持って捉えられている」とし、「紀伊国の妹之山・勢能山の発想も、二峰の山容に由来するとみるのがよい」と説いた。

また、古代道路が現在の国道24号線よりもかなり北側の山際を通っており、「この道々から見える背山は、二峰がくっきりと確認できる山容を持つ」といった実景から、背山二峰説を補強した。

確かに紀ノ川の北側に位置する“かつらぎ町”の佐野や蛭子地区からの景は、背山二峰説を支持するように見える。二つの峰(今日の鉢伏山と城の跡)が際立っている(写真4)。しかし、かかる景は自然的秩序としての二峰を呈しているようには見えるが、文化的秩序としての妹山／背山が定位されていないように思われる。奈良時代人の神体山観(ここでは説明上仮にこう称しておく)による景は少し異なっている。

筑波山には「男神・女神」が二並し(巻9・1753)、奈良二上山には「二上(二神)＝北の雄岳、南の雌岳」が二並し、越中二上山には「皇神」(巻17・3985)が領している。すなわち、一山二峰の山容は“カミ”を表象しているのである。それらは神体山の側に属し、その土地のクニの領域を一望に見渡せる山容として存在する。決して、整美な一山二峰の様相を備えておりさえすれば、どこでもカミの宿りが認識されていた訳ではない。選ばれた山容にだけ「カミ」を表象する文化的秩序が付与されている。要するに一山二峰の山容は「カミ」世界を表象しているのである。

一方、妹山／背山について奈良時代人は、出雲系の「大穴道 少御神の作らしし」(巻7・1247)ヤマと認識していたらしい。であるならば、古代出雲人のカミの宿る山の在り方から演繹するのが有効と思われる。『出雲国風土記』(733年成立)には、出雲の「神奈備山」が4例記されている。祭祀考古学の提唱者である大場磐雄氏が整理した比定は次の通りである(現代地名は平成の大合併以前の表記である)。

意宇郡の神名樋山(松江市大庭所在茶白山)、榎縫郡の神名樋山(平田市大渋山?)、出雲郡の神名火山(簸川郡斐川町仏経山)、秋鹿郡の神名火山(八束郡鹿島町の朝日山・麓に佐太神社鎮座)。

訪れて見ると一目瞭然である。これらの比定地には一山二峰を成すものは一例も無い。独立峰かまたは独立峰が山稜上に突出した姿形を呈している。出雲におけるカミの宿る山容はかかる姿形で表象されている。諸国に分布する神奈備山の信仰は出雲に発するとみる説がある。早くに安藤正次氏が「出雲、その他の例も神奈備といふ名稱が、出雲系統の神社に限られる」とし、大場磐雄氏もこれを支持している。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

かかる先学の見解は、三諸の神奈備として知られている奈良・三輪山に出雲系の大物主神が領していることから理解できる。三輪山は言うまでもなく三角形（円錐形とも）の整備な山容として聳えている。

かかる出雲に由来する神奈備山の姿形観は「大穴道少御神」も踏まえているはずである。大穴道少御神が御祖となり擬人化された名称を有する「妹山／背山」も、出雲の神奈備山の体系の中にあると解せられる。

すなわち一山二峰はカミの領く山容の性格を有し、一方「妹山／背山」は単独峰で擬人化されていて、互いに神体山観としての性格が異なるのである。

奈良時代人は決して両者を混同することはなかったであろう。故に、「背山二峰説」は成立しないと思われる。

5. 吉野川と紀ノ川の妹背山

村瀬憲夫氏による妹背山論では、紀ノ川のそれが最初（『万葉集』）に認識されていて、吉野川のそれが知られるようになったのは『古今和歌集』（恋五、巻15・828）に誘発されたものであったとする。つまり紀ノ川の妹背山が古く、吉野川の妹背山が新しく認知されたと説いている。しかしながら私は現地の景に従う限り、このプロセスは成立しないとみている。

考古学の基本的な研究法に型式論や形式論がある。仔細な説明は省くが、それによれば遺物や意匠は時間の経過に伴って当初の文様や形に退化や省略現象が認められる。ほかに、「原型（モデル）」と「複製（コピー）」論がある。原型があって、それを模倣したのが複製である。原型は古くてティピカル（typical）なのに対して、複製は新しく不鮮明（obscure）である。これは文化伝播や情報伝達の在り方を探る方法として有効である。

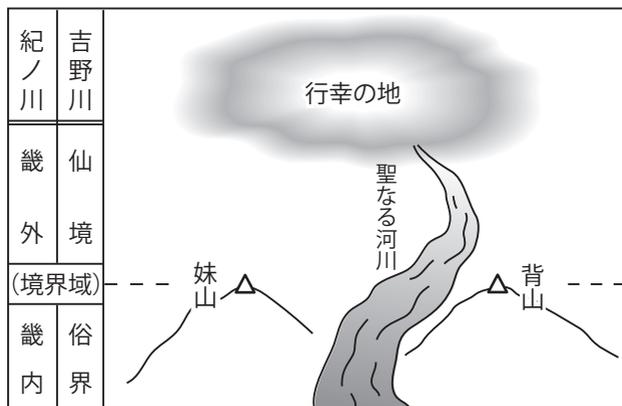
また近年の認知考古学の成果によって、土器の形態の「範型」構造が明らかとなっている。範型は「典型」を中心とする同心円構造をもっており、中心的成員であるか周縁的成員かによって範型に差異や変化が認められるという。これらの方法論から吉野川と紀ノ川の「妹山／背山」の景を

みれば、どちらが中心的、原型的で、どちらが周縁的、複製的かが導きだせる。

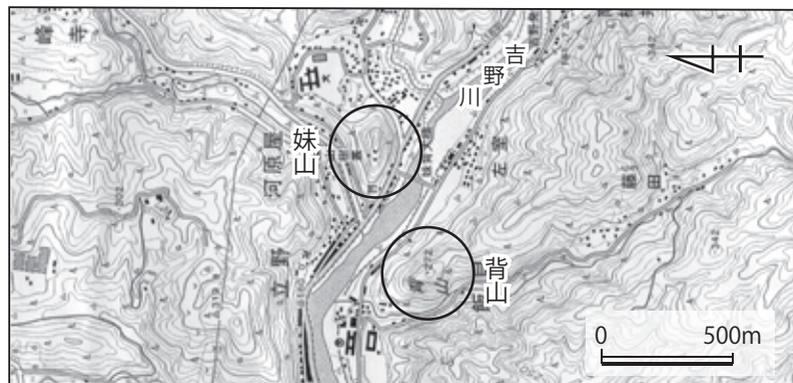
吉野川の妹山／背山は河川を間に挟んで、明瞭な三角形の“類神奈備山”（類は神奈備中において二次的といった意味で付した）の姿形を呈している（写真1）。妹山の南麓には式内社大名持神社が鎮座している（写真2）。和田萃氏は「七世紀後半に大和でも出雲のオオナムチ神に対する信仰が高揚し、吉野の妹山に勧請された可能性が大きい」としている。⁽¹⁹⁾また、本居宣長が明和9年（1772）に吉野の地を訪ねた折の『菅笠日記』には、渡し守の船頭に「妹山はどれか」と尋ねると、「川上の方に流れをへだてて、向かい合ってま近に見える山で、東側を妹山、西の方を背山」と教えてくれたとある。宣長は、続けて「本当にこの名をもつ山は、紀伊国にあって疑うべくもないのに…（中略）…きっとここだと決めてしまったのは、世の風流人のしたことだろう」と記している。⁽²⁰⁾宣長の「世の風流人云々」の記述については従えないが、市井の「渡し守の船頭」が的確に妹山／背山の所在を説いていることに注目したい。吉野川のそれは明和9年の時点において「世の風流人」ではなくて、名も無き土地の人々に周知されているのである。かかる周知がいつまで遡るかについては史料を知らないが、少なくともその認識は7世紀後半の大名持神社の勧請時期にまでさかのぼるだろうと思われる。

一方、紀ノ川の妹背山について同定に諸説のあることは前述したとおりである。当地では、長者屋敷の地を「妹山」とする奇説が鎌倉時代以来踏襲されている（写真3）。また今日、鉢伏山に比定されている「背山」についても流動的（貝原益軒の船岡山説にみる）であったようだ。諸説が早くから頻出しているのは、とりもなおさず背山／妹山の比定が現地において定着しなかったためであろう。このように妹山／背山の景の比定は人々の記憶から薄れている。山容に関して万葉時代人と現代人とが認識を共有できなくなっている。この地の背山／妹山が、典型的な範型や原型から外れていて、周縁的であり複製的であることが大きな理由と解せられる。

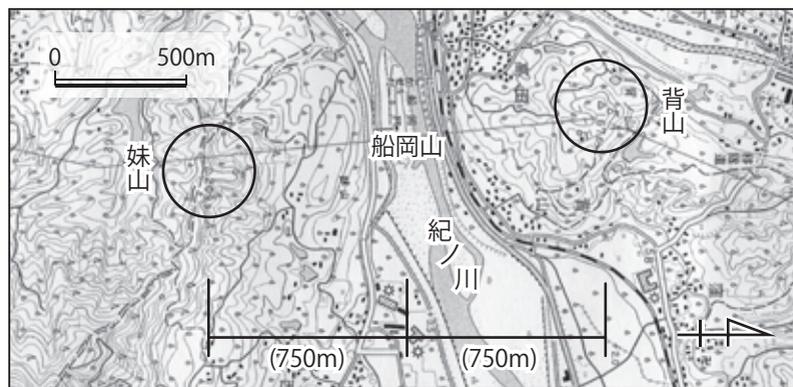
考古学の方法からは、吉野川の妹山／背山はティピカルなセット関係と山容を有し原型に近いとできる。一方、紀ノ川の妹山／背山は非典型的である。このような両地域の関係性からみれば、吉野川の妹背山が古くに存し、それをモデルとして紀ノ川の妹背山が認定されたのであろうとできる。その違いは歴然としている。



第1図 妹山/背山配置構造モデル図



第2図 吉野川の妹背山の位置図



第3図 紀ノ川の妹背山の位置図 (妹山は藤田による比定地)



写真1 吉野川の妹山(左)と背山(右)の景 (奥が仙境宮滝)



写真2 吉野川の妹山の麓に鎮座する大名持神社



写真3 紀ノ川の妹山(左)と背山(右)の景 (奥が畿外)

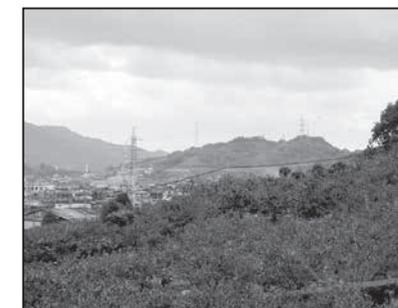


写真4 紀ノ川の背山の全景(佐野地内から)



写真5 紀ノ川の妹山の景-藤田比定-(中央三角形の山)



写真6 紀ノ川の妹山の近景(「道の駅」紀ノ川万葉の里付近から)

6. 人麻呂歌集の妹背山歌の歌作地

(1) 人麻呂歌集とは

ここに吉野川の妹背山が、紀ノ川の妹背山より先行して成立していた可能性を述べた。このことに関して『万葉集』に収載された柿本人麻呂歌集の1首が目される。稲垣耕二氏が吉野川のそれを詠んだとされているものである。⁽²¹⁾

①大穴道 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らく良しも (巻7・1247、柿本朝臣人麻呂歌集)

(原文) 大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

稲垣氏はその根拠として吉野川の妹山の麓には式内社の大名持神社が鎮座していることをあげている。私は、かかる稲垣論文を踏まえて前稿を著した。仔細はそれに記しているの、ここでは重複を避けたい。

一方、村瀬憲夫氏は当該歌が4首の「羈旅作」の中に納められていることに着目し、もしそれが「吉野の詠であったなら、巻七編者は迷うことなく『羈旅歌』の項ではなく、『芳野作』の項に組み込んだはずである」とし、編者は当該歌は吉野の作ではないと判断したためと説いている。そして、万葉集の「大汝少彦名」歌3首(後述する)が「いずれも万葉後期の作である」ことから、「当該歌には、人麻呂歌集略体歌について一般的に言われている『古さ』に比して、もう少し後期的な新しい要素があるということである」とし、「後期的な新しさ」といった時間軸の柔軟な許容範囲も残しておく必要があるとしている。⁽²³⁾

村瀬氏は、まず編集の問題を提示するが、筆者は『万葉集』の編集論に関する知識を持っていないので論じることができない。かかる所見のあることを紹介するにとどめたい。

次に、村瀬氏は当該歌の「後期的な新しさ」を強調している。持論として「妹背山」詠全15首が紀ノ川で詠まれ、当初は「背山」のみが存在し、「妹山」は笠金村による神亀元年(724)聖武天皇紀伊国行幸時の歌(巻4・544)が初出で、その時初めて妹山・背山の二山がそろったとしている以上、人麻呂歌集(巻7・1247)が早くに「妹背山」を詠んでいるのでは具合が悪い。当然のことである。

ところで村瀬氏が、他の「大汝少彦名」歌3首が「万葉後期の作」であることから当該歌にも「後期的な新しさ」が見出せるとしているのは妥当であろうか。

まずは人麻呂歌集とは、どのようなものなのか、先学の研究をなぞるところから始めたい。「万葉集の人麻呂関係歌には人麻呂作と明記された歌と柿本人麻呂歌集から採録したと記す歌がある。この歌集の歌の性格については問題が多いが、書式上、略体歌と非略体歌と呼ばれる二群に分かれる。そして非略体歌については、ほぼ人麻呂の自作であろうと大方にみとめられている」とされている。⁽²⁴⁾歌体について当該歌は略体歌に分類されている。

性格について、「人麻呂歌集はその一端が、東国歌とも重なり、作者未詳巻ともつながり、かつまた人麻呂作歌ともかかわる歌の集だったことを意味していよう」とされ、また「人麻呂歌集は、人麻呂作歌と同様に、人麻呂の作品を集めた集とみる考え方が近時の一般的な見方となりつつあるかのように思われる。また稲岡耕二氏などのいう、人麻呂は、最初、人麻呂歌集略体歌のようなものを作り、それに続いて同集の非略体歌にみられるような歌を作り、その後、人麻呂作歌と記される歌をよんだとする考え方もかなり多くの人の支持するところとなりつつあるかに思われる」とされている。⁽²⁵⁾

略体、非略体の研究を牽引する稲垣耕二氏は、略体歌は万葉集の中でもっとも古い表記の特徴を残す部分であると述べ、「天武朝以前の和文は、付属語を文字化することのきわめて少ない『古体』(略体)の表記であったと推定される」としている。当該歌(巻7・1247)にあっては書法に加えて、敬語の「ツラス」を表意的に表す場合に「作」としているが、敬語「ス」に相当する文字を欠いていることを指摘し、敬語「ス」の非文字化は『古事記』でも同様で、それは古体歌の基本的なあり方であったとしている。⁽²⁶⁾

(2) 妹背山を作った「大汝少彦名」

当該歌で注目したいのは、妹背の山を作ったのは「大穴道 少御神」とされていることである。『新編日本古典文学全集』の頭注によれば、大穴道は大国主神の異名の一つで、少御神は少彦名とも呼ばれるとあり、「万葉集では二神を並べて、物事の起源の古いことを説く例に引かれることが多い」と解説されている。⁽²⁷⁾大穴道は大汝、少御神は少彦名と表わされることがある。

本歌について伊藤博氏による口語訳は、「その大昔、大国主命と少彦名命の二柱の神がお作りになった、妹と背の山、ああ、この山を見るのは、何ともいえずすばらしい」とする。記者によって微妙な違いがあるが、伊

藤沢では「その大昔」とする一言があって、歌意のニュアンスが伝わってくる。『万葉集』には他に「大汝少彦名」を詠んだ歌が3首ある。次にそれを見ておきたい。

②冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を発ちて道に上り、筑前国の宗像郡名を名児山といふを越ゆる時に作る歌一首

大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを 名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰めなくに (巻6・963)

※この歌は天平二年(730)の作である。

③生石村主真人が歌一首

大汝 少彦名の いましけむ 志都の岩屋は 幾代経ぬらむ (巻3・355)

④史生尾張少昨を教へ諭す歌一首 併せて短歌

(題詞・省略)

大汝 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を 見れば貴く 妻子供れば かなしくめぐし うつせみの 世の理と……

右、五月十五日に、守大伴宿禰家持作る。(巻18・4106)

※この歌は天平感宝元年(749)の作である。

①歌は、妹背山を「作らしし」とし、②歌は、筑前国の名児山を「名付けそめけめ」としている。これらの事例をみる限り、大汝少彦名はセットとなって、各地の名山への命名や創生と関わっている。けだし、それが当時(奈良時代)の普遍的な認識であったかについては分からない。

②歌は、天平2年(730)11月に大伴坂上郎女によって詠まれたものである。そこには「大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ」とある。名児山の名の由来が「大汝少彦名」に因むものとする土地の伝承としてあったことから誘発されての歌作であったのか、それとも大和人である郎女の判断として「大汝少彦名」が持ち出されたかが問題となる。『新編日本古典文学全集』の頭注では、「大汝少彦名」とあるのは「山名が古く、由緒あるものであることをいうために引いた」とし、口語訳では「大国主と、少彦名の 神々が 名付け始めたということだが…」とする。⁽²⁹⁾また、『新潮日本古典集成』は、「この名児山の名は、神代の昔、国造りをした大国主命と少彦名命がはじめて名付けられたのであろうが…」とし、多田

一臣氏は、「大汝、少彦名の神こそが、初めて名づけたのだろうが、名前ばかりを心が和む『名児山』と背負っているだけで…」とする。⁽³¹⁾

これらの普及本による理解は、いずれも詠み手(郎女)の知識を眼前の由緒ある山名に投じていると解しているように思われる。

このことについて伊藤博氏の指摘は明快である。この長歌が他に類のないナクニ止めとなっていることに注目し、「名草山」を初句とする巻7・1213に類想歌のあることや、①歌の「大穴道 少御神の 作らしし」と郎女の長歌前半部とが似ていることから、「郎女はこれらの歌を知っていて、それらを踏まえつつ、つなぎ合わせるようにして今の作を詠んだのかもしれない。だからこそ、長歌には珍しいナクニ止めの歌が生まれたのかもしれない」としている。⁽³²⁾

作者は大伴旅人の異母妹大伴坂上郎女で家持の叔母である。伊藤氏等の説くところに従えば、生粋の宮人である郎女が、筑前の由緒ある整った山容の景に接し、人麻呂歌集にある「大穴道 少御神の 作らしし」歌を想起して詠んだものできよう。歌作年月は、天平2年(730)11月となっている。

③歌は、生石村主真人による。名前に「村主」とあることから渡来系の人物であったとみられている。天平10年(738)頃、美濃少目となり、天平勝宝2年(750)外従五位下を拝授したとされている。本歌の歌作年は不詳であるが、官位拝受を目安とすれば8世紀前～中葉頃に成立したとできよう。

④歌は大伴家持の作である。越中国の遊行女婦に浮気をした史生尾張少昨を国守家持が諭す歌である。歌作年月は、天平感宝元年(749)5月である。

当該歌(巻7・1247)の理解を、これら「大汝少彦名」歌の体系の中で行いたい。⁽³⁴⁾

人麻呂歌集(巻7・1247)を除いて、最も古い歌は大伴坂上郎女の天平2年(730)で、新しい歌は大伴家持の天平感宝元年(749)である。生石村主真人の歌は、巻3の最新の歌が天平16年(744)とされているので家持以前に属するとできよう。

伊藤氏によれば、人麻呂歌集を踏まえて大伴坂上郎女が「大汝少彦名」を詠んでいることになる。家持は郎女を叔母にもち、その子である坂上大嬢を妻としている。「山柿の門」歌で知られているように家持は人麻呂を理想の手本としている。

かかる郎女や家持が「大汝少彦名」を詠むとき、そこに人麻呂歌集が共

通認識されていたとしても不思議ではないであろう。このことは、郎女が「大汝少彦名」歌（巻7・1247）を事前に知っていたと解することで、より明確となる。これが認められるとすれば、天平2年（730）に詠まれた郎女の「大汝少彦名」歌が、人麻呂歌集（巻7・1247）を踏まえているのであるから、当然、巻7・1247歌は天平2年以前に成立していたことになる。

加えて、当該歌が、「大穴道 少御神の 作らしし 妹背の山」と詠んでいることに注目したい。歌作時において「神代の昔」に妹背の山が成ったとの認識が示されているのである。ここでは地元の伝承を基に歌われた可能性を推測しておきたい。かかる伝承の成立が、仮に天平2年（730）より40年前であったとすれば持統4年（690）となる。持統4年は、「妹背山」歌で最も古いとされる阿閉皇女の歌（巻1・35）の制作年と重なる。

ちなみに、阿閉皇女の歌には「背山」しか出てこないが、皇女が「妹」を詠むはずもないので、これをもって当時「妹山」は認識されていなかったとは出来ない。変幻自在論に陥る恐れがあるが、もし伝承の成立が天平2年よりも50年先行していたとすれば、当該歌は妹背山詠最古の位置を占めるところとなる。⁽³⁵⁾

ここで、それでは当該歌は吉野川でのものか、それとも紀ノ川でのものかが問題となる。紀ノ川の最古詠は阿閉皇女の歌で持統4年（690）である。一方、柿本人麻呂歌集の1首は、古体（略体）歌に属し、それよりも古い可能性を秘めている。7世紀後半には吉野の妹山の南麓に大名持神社が勧請されたと見られている。妹背山に関する型式・形式・範型論的視点からは吉野川の妹背山に原型があるとできる。これらから、「大汝少彦名」歌（巻7・1247）は吉野川の妹背山を対象として詠まれた可能性が大きいと思われる。

7. 収束

ここでは、万葉歌に多出する紀ノ川の妹背山の原型は吉野川の妹背山にあり、それぞれの妹背山は単独峰を有する山容として万葉人の認識の当初から二項対立の類型で具現していたとした。このことによって、柿本人麻呂歌集の「大穴道 少彦名」歌（巻7・1247）や大伴家持が饒石川で詠んだ「妹に逢わず 久しくなりぬ」歌（巻17・4028）が、無理なく理解できるところとなる。

擬人化された山容の妹山／背山について、その配置は極めて意図的であ

らと思われる。吉野川と紀ノ川といった紀伊半島を縦走する1本の河川の上流域と中流域とにそれが認められる。吉野川の場合は吉野仙境への出入口に立地し、紀ノ川の場合は畿内と畿外の境界域に立地する。いずれも行幸先を、その先に有している。境界域と行幸ルート、この2つが妹山／背山の成立と関わっていそうだ。互いの立地は構造を同じくしている（第1図）。

吉野川での妹山／背山の場合は、自然的秩序を満たす三角形の二山が吉野川を挟んで対峙して理想的な配置に成功している（第2図）。一方、紀ノ川での妹山／背山の場合は、現代的視点からは分かりにくい基準で妹山／背山が配置されているようだ。後代の人々の山容観が変化したことが、比定地に関する地元伝承が早くに失われた原因であろう。けだし、持統朝や奈良時代の人々にとっては、妹山／背山は実体として認識されていたであろうことは想像に難くない。

私見では、紀ノ川の妹山／背山に関して、紀ノ川右岸の鉢伏山（標高167.6m）をピークとする山容を通説に従い「背山」に、左岸のいわゆる“長者屋敷（標高100～200m）”の背後にあって三角形を呈する山容（標高209.9m）を「妹山」に充てたい（写真3～6、第3図）。両者の距離は約1,500mを測る。妹山の比定に関して、従来説に縛られていぶかる向きもあろう。けれども、紀ノ川の中巢にあたる船岡山を基準とすれば、私見による「背山」、「妹山」はそれぞれ等しく約750m離れて、単独峰として在る。正確に等距離を保って立地している。かかるバランスが「妹山／背山」の配置において大切であったに違いない。配置に際しては、構造主義的言語体系による「等価対立」が満たされているかが基準となっていた可能性が高い。紀ノ川にあっては、当地においては妹山／背山が当初から〈特別に妹山を求めなくとも〉⁽³⁶⁾ 厳然と存していたと思われる。

8. おわりに

本稿執筆に際して主に村瀬憲夫氏の論文や著書から多くを学ばせていただいた。同時にいくらかの疑問を感じる個所について、ここに卑見を述べさせていただいた。誤解に基づく記述も多々あると思われる。これまで緻密に構築されてきた万葉学の常識や方法を逸脱し、乱暴で冒険的な記述となり直ちには受け入れ難いものを含んでいるであろう。また、推論を重ねた個所や思い込みによる記述も多々あると思われる。これらについて識者のご教示とご批判をいただければ幸いである。

なお、私は考古学を専らとしていて万葉学には門外漢である。本稿が異分野からの一私見として妹背山論の深まりにいくらかなりとも寄与するところがあれば望外の喜びである。

末筆となったが、本紀要への掲載にあたって敬和学園大学の松本ますみ教授のご指導を頂いた。また、作図などで畏友・中村年昭氏のご協力を頂いた。記して厚く御礼を申しあげたい。

註

- (1) 松尾光「越中守・大伴家持の寄り道一饒石川を渡る一」『歴史研究』591号<第53巻第5号>歴研 2011年, 50~53頁。脱稿後、同氏から『古代の社会と人物』（笠間書店 2012年）の恵予を受けた。前掲論考が同書に補訂再録されている（229~244頁）。そこでは、拙稿註(2)への批評が成されている。本稿は、それに直接答えるものではないが、私論補強の基礎的作業の一つとして執筆したつもりである。
- (2) 藤田富士夫「大伴家持が見た饒石川の景」『敬和学園大学研究紀要』第21号 敬和学園大学人文学部, 65~84頁
- (3) 村瀬憲夫「笠金村と紀伊」『万葉の風土と歌人』雄山閣 1991年, 207頁。同『紀伊万葉の研究』和泉書院 1995年, 44頁（再録）。
- (4) レビイ=ストロース（大橋保夫編）『クロード・レビイ=ストロース日本講演集 構造・神話・労働』みすず書房 1979年, 68~69頁
- (5) J・B. ファージュ著、加藤晴久訳『構造主義入門』大修館書店 1972年, 39頁
- (6) 亘明志『記号論と社会学』ハーベスト社 2004年, 55頁
- (7) 村瀬憲夫「万葉集の背山・妹山—吉野の妹山・背山をめぐって—」『文学・芸術・文化』近畿大学文学部論集 第18巻第2号（通巻第41号）近畿大学 2007年, 13頁
- (8) 犬養孝『万葉の風土 続』塙書房 1972年, 173頁。小山靖憲「第一節 律令制下の那賀郡」『那賀町史』和歌山県那賀郡那賀町 1981年, 57~58頁
- (9) 中田祝夫、和田利政、北原保雄編『古語大事典』小学館 1985年, 899頁
- (10) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 万葉集②』小学館 2006年, 193頁
- (11) 竹中康彦「第一節 律令制下の伊都郡」『かつらぎ町史 通史編』かつらぎ町 2006年, 131~132頁
- (12) 澤瀉久孝『万葉集注釋 卷第三』中央公論社 1959年, 155頁、同『万葉集注釋 卷第七』中央公論社 1960年, 40頁
- (13) 村瀬憲夫「妹勢能山詠の諸問題」『万葉集研究』第27集 2005年, 369~370頁
- (14) 註13, 363~392頁
- (15) 大場磐雄『大場磐雄著作集第五巻 古典と考古学』雄山閣出版 1976年, 156~157頁
- (16) 安藤正次『古典と古語』三省堂 1935年, 360頁

- (17) 註15, 163頁
- (18) 松本直子「認知考古学は人・モノ・社会の新しい関係を考える」『はじめて出会う日本考古学』有斐閣アルマ 1999年, 83頁
- (19) 和田萃「第五章 古代史からみた霊地吉野—神仙境・憧憬の山河」『吉野仙境の歴史』文英堂 2004年, 147頁
- (20) 本居宣長（桐井雅行現代語訳）『菅笠日記』『憧憬 古代史の吉野—記紀・万葉・懐風藻の風土—』奈良県吉野町経済観光課 1992年, 118頁
- (21) 稲垣耕二「大名持神社と人麻呂歌集—人麻呂の工房を探る（其の三）—」『萬葉』第188号 萬葉学会 2004年, 32~45頁
- (22) 註21, 40頁
- (23) 註13, 383~390頁
- (24) 橋本達雄「家系と出自」『柿本人麻呂 人と作品』おうふう 1989年, 18頁
- (25) 森淳司「人麻呂と人麻呂歌集—巻十四東歌より—」『柿本人麻呂 人と作品』おうふう 1989年, 185・204頁
- (26) 稲岡耕二『人麻呂の表現世界』岩波書店 1991年, 9頁・117頁
- (27) 註10, 231頁
- (28) 伊藤博『萬葉集 釋注四 卷第七 卷第八』集英社文庫 2005年, 191頁
- (29) 註10, 131頁
- (30) 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎校注『新潮日本古典集成 萬葉集二』新潮社 1978年, 137頁
- (31) 多田一臣訳注『万葉集全解2 卷第四 卷第五 卷第六』筑摩書房 2009年, 362頁
- (32) 伊藤博『萬葉集 釋注三 卷第五 卷第六』集英社文庫 2005年, 342頁
- (33) 稲垣富夫「生石村主真人」『万葉集歌人大事典』雄山閣 2007年, 47頁
- (34) 「大汝少彦名」歌は、万葉歌人中で柿本人麻呂（歌集）、大伴坂上郎女、生石村主真人、大伴家持の4人だけに見られる。奈良の都を中心として活躍した宮人たちである。「大汝少彦名」と半ば常套句化した用法には、これら宮人のヤマの創造主に関する認識が投影されているであろう。柿本人麻呂と彼の歌風を理想とした大伴家持、そして郎女といったグループに偏在しているようにも見える。
- (35) 人麻呂歌集の成立に関して、金沢英之氏の解説では「『人麻呂作歌』と記される歌集歌以外の歌が作られはじめる六八九年頃までの作と目され、歌集として構成されたのは持統朝の段階と考えられている」としている（「略体」『万葉集鑑賞事典』講談社学術文庫 2010年, 287頁）。また、神田秀夫氏は巻7・1247~1250の4首は人麻呂の石見湯抱温泉に遊んだ折の歌とし、前後の人麻呂の足跡から本歌の成立を持統7年（693）とし、「巻七、一二四七~一二五〇番歌は二組の唱和で、一二四七・一二四九番歌はこの石見娘子の歌だと思ふ」と成立年代や作者にまで踏み込んでいる（『人麻呂歌集と人麻呂』塙書房 1965年, 219・226頁・人麻呂年表280頁）。管見ではあるが、これらには人麻呂歌集の当該歌の成立時期が示唆されている。
- (36) 妹山/背山の比定に関して山容の在り方からはここに想定したのとは逆の方が安定性が高いと思われるが、ここでは通説による「背山」の比定地を基準とした。いづれ考えてみたい課題の一つである。